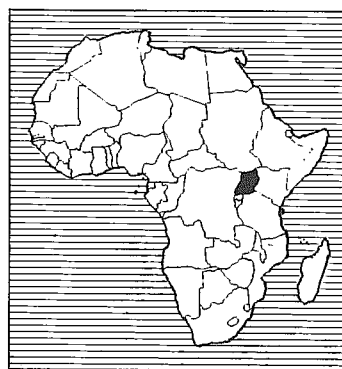


ウガンダ 再訪記



■ 吉田昌夫

はじめに

1960年代はウガンダの黄金時代と呼んでもよいような時期であった。62年にイギリスの保護領から独立したとき、その経済は堅調で、主産物のコーヒーは、ブラジル、コロンビアに次いで世界第3位の生産量を誇っていた。長い歴史のある綿花生産も、アフリカ人小農の販売協同組合の成長がみられ、戦前の最盛期の水準に戻ろうとしていた。安定した気候条件を持つ国土は緑豊かで、特に首都カンパラ付近の農家は、主食用のマトケ(プランテン・バナナ)とコーヒーの混栽の茂みのなかで、豊かなたたずまいを見せていた。住民の教育水準は東アフリカ随一といわれるように高く、私立のセカンダリースクールが数多くあり、またマケレレ大学は、東アフリカ全体の指導者養成校としての性格を持っていた。大学付属のムラゴ病院は、当時アフリカで最も良い病院の一つとされていた。

このウガンダに、アジア経済研究所から海外派遣員として1963年12月に入国し、研究所を休職して延長した1年間を含めて合計3年間滞在した経験を持つ私にとって、27年後の再訪問には特別の感慨があった。もっともウガンダを短期間訪れる機会が、この間に4回あったのであるが、最後に

訪れた79年11月の3日間のカンパラ滞在は、混乱期を少し覗いたようなものであった。暴君の名をほしいままにしたアミン大統領が追放されて間もなくの時で、町の有り様は、無残としかいいようのないものであった。ホテルには帰国した難民があふれており、ようやく入ることができたホテルは、長い間の断水で、洗面と水洗便所のために、1日バケツ一杯の水が支給されるだけという状態であった。その後もウガンダは政変が多く、経済的にも回復が遅れ、私には再訪する機会もなく、訪れようとする気力も出なかったのである。

それが昨年8月、勤務先の大学の調査費を得て東アフリカのタンザニアの農村調査へおもむく往路に、ウガンダを一週間ほど訪れる機会を持つことができた。3年間暮らしたウガンダがどのように変わっているのか、事前に聞いた情報では大変よくなっているとのことと期待しながらも、一抹の不安を抱いて成田を出発した。

活気を見せていたカンパラ

カンパラの空の玄関であるエンテベ空港は、構内に店も見当たらず静まり返っていた。それがカンパラ市内に入ると、普通の賑わいが戻っていた。七つの丘の町といわれた起伏の多い市内の通

りは自動車が多く、そのほとんどが日本製の中古車であった。市内にとったホテルの名は「シャンハイ・ホテル」といって、ウガンダの復興を予見したホンコン人経営の中華料理屋が、元イギリス人の社交場であったカンパラ・クラブの建物を借り切って、改造したホテルであった。市の中心にあつて宿泊料も安く、清潔で心地よかつた。

すぐ町の外貨交換所でドルをウガンダ・シリングに換えたが、待たずにすぐ交換してもらえた。しかし250ドルを換えてもらった札束は、厚さが5センチもあつてびっくりした。1980年代から90年代初めにかけての急速なインフレと平価切り下げで、1ドルが1170シリングにもなつていた。それにもかかわらず最高額紙幣が1000シリング、多く流通しているのは500シリングに留まつているのである。これでは財布などは全然用をなさず、バッグに札束をむき出しでいれて運ぶほかはない。

まずマケレレ大学がどうなつているか見に行く。日本が最近ODAの無償援助で、理学部本館を建てたということを聞いていたのでまずそれを見た。アミン大統領の頃から荒廃するにまかされてきたマケレレ大学に、久しぶりに新しい建物ができたということで、面会した副学長のセンチザ・ガジュビ教授もたいへん喜んでた。

次に入った大学図書館は、この20数年来のマケレレの落ち込んだ歴史を象徴するような状態であつた。ここは私がマケレレ大学の農学部博士課程に籍をおいていた時の仕事場であつたところである。当時は東アフリカの四つの植民地政府(ウガンダ、ケニヤ、タンガニーカ、ザンジバル)が発行した公文書の保存図書館となつており、それが棚に配架されているアフリカーナ室に出入りする許可をもらった私は、考えてみれば大変な便宜を与えられていた。当時この図書館は、東アフリカ研究のメッカともいふべき場所だったのである。

それが今回入つてみると、なんとも薄暗いのである。天井にあるソケットには、ほとんど蛍光灯がついておらず、学生たちは暗い中で本を読んでいる。カーペットをはがれ、職員にみせてもらいたいと頼んだ資料は、とうとう出てこなかつた。

昔住んでいた家がどうなつたか見るのも、今回の訪問でぜひ果たしたいことの一つであつた。6か月住んでいたマケレレ大学農場カバニョロ・ファームに、タクシーで16キロの道を急いだ。農場は昔の通りの雰囲気であつた。前に住んでいたスタッフ・ハウスはウガンダ人の農場管理次長が住んでいた。庭側にまわると、ベランダの前になんと500羽を越す鶏が入っている手作りの鶏舎が建つていないか。現在は公務員の給与が低く抑えられてインフレに追いつかず、副業でも持たない限り生活できないとは聞いていたが、個人で(農場のものではなく)こんなに多くの鶏を飼つていることなどは想像もしていなかつた。

次に行ったのは、市内の最大のナカセロ・マーケットである。1927年にできたマーケットには、以前のように活気があり、野菜、果物、肉、魚、穀類、調味料、主食用バナナ、さとうきび、生きた鶏などが、所せましと売られていた。野菜類は以前に増して種類が多くなつており、トマトなどは昔より大ぶりになつた。ここで見た庶民の経済活動から、ウガンダ経済の回復ぶりが実感できた。ウガンダ人のある会社員から聞いた「今ウガンダ人はみな働きだした」という言葉からも、ウガンダの復興が軌道に乗つたように思つた。

王様の復権

ウガンダへの途次、ベルギーのホテルで見たテレビのニュースで、ウガンダ最大の部族のブガンダで前王の息子のムテビ氏が、新しいブガンダの

王として即位したと報じていた。いったいウガンダには何が起きているのか、以前私たちの滞在期間中に起こった諸王たちの廃位という事件は、歴史上のほんの一時期のエピソードとなってしまふのだろうか。私は事情が良く判らないままウガンダ入りすることになった。

ウガンダが独立した時は、一種の連邦制をとっており、国内の4王国、すなわちブガンダ、ブニョロ、トロ、アンコーレは大幅な自治権を持ち、ブソガも準自治権を持つとされていた。とくにブガンダは、首都カンバラを含むウガンダ中心部に位置し、その王(称号をカバカという)はウガンダ全体の大統領となった。しかし、選挙で選ばれた最大多数政党の党首で首相となったミルトン・オボテとカバカの対立が、ブガンダ王国の地位をめぐって対立し、それが頂点に達したのが1966年で、この時オボテ首相は軍総司令官のアミンに命じて、カバカの王宮を攻略させ、亡命したカバカはイギリスで客死した。その後ウガンダは、1967年の憲法で共和国となり、王制は廃止されて、王たちは皆その地位を失ったのである。

カンバラに着いた時、私がまず知りたかったことは、再び王位を復活したといわれるカバカとウガンダ政府との関係であった。昔のようにブガンダの特殊な地位を認めてしまつては、再び中央政府との権力闘争が始まり、政治の不安定をもたらした過去の歴史を繰り返すだけではないかと思ったのである。しかし、何人かの人に聞いてみて不安は一応解消した。今回の措置で復権した王たちの権限は、文化的、儀式的(celemonial)なものだけであり、彼らが以前持っていたような政治権力を再び持ったわけでないというのが、一致した説明であった。またこの措置は、ブガンダだけではなく、他のエスニック・グループすべてにも適用されるものとして法制化された、という事実があ

った。ウガンダの東部や北部は、王制をとらずに首長制や長老制の政体を持っている部族で占められている。このため「王」という言葉を法律の上では一切使わず、「伝統的統治者」(Traditional Ruler)という言葉が使われたのである。

政府刊行物を販売しているウガンダ・ブックショップで手に入れた官報でもこのことは確認できた。1993年6月25日付け官報にのった「憲法改正法案」には、伝統的統治者を廃止することをうたった憲法を改正して、彼らが以前に所有していた資産を返還することを許容する、と記されている。またその共同体に属する人々の意思に基づいて、彼らの文化、習慣、伝統にそった伝統的統治者の制度が存在してもよい、と述べられている。ただしその伝統的統治者は政治活動をしてはならず、中央と地方において、行政、立法、司法上のいかなる権力も行使してはならない、と定められた。

このように、法律によって復権がなされた伝統的統治者、なかでもブガンダの「カバカ」、ブニョロとトロの「オムカマ」、アンコーレの「オムガベ」、ブソガの「キャバジンガ」は、伝統的な祭儀などに関連した文化的な面での王として復活したのである。いわば西アフリカのガーナのアシャンティにおける「アサンテヘネ」、ブルキナファソのモシにおける「モロ・ナバ」のような王として再生させられたのである。

しかしウガンダにおいては、一旦廃止させられた王が復権したという過程をとったことで、いかに法律上政治活動が禁止させられているとはいえ、文化復興の動きの中で、王たちが政治的に利用される可能性がある。ガンダ人の何人かにカバカの復権をどう思うかと聞いてみたところ、一様に「大変嬉しい」、「これでウガンダ再建が確実となった」というような答えが返ってきた。海外に流出している大勢のガンダ人も戻ってこようとしていると

いう。ウガンダの諸地域の中で抜群に豊かなブガンダの人たちの意気が上がったことは確かであるが、他の地域の人たちの反発を買うようになったら、もとのもくあみである。ここは誇り高いガンダ人が、いかにブガンダではなく、ウガンダのために行動するかが問われる場面になろう。

ムサジの墓

ウガンダの独立運動の歴史は長く、1938年に、ブガンダの神話上の王の名をとった「キントウの息子たち」(Sons of Kintu) が反英活動を開始したときから、62年の独立まで続いたとあってよい。その「キントウの息子たち」の創始者で、40年代の綿花販売協同組合運動を指導し、49年の暴動の責任者として植民地政府にとらえられ、50年代には「ウガンダ民族会議」(Uganda National Congress) の書記長となって、全ウガンダを巻き込む民族主義運動を指導したのが、イグナチウス・ムサジである。

ムサジは、ケニアのケニヤッタと並び称されるべき建国の志士であるのだが、国内、国外を問わず人々はその名をあまり知らないと思っていた。彼は、固い意志を持ちながらも、温厚で、ずば抜けて広い視野を持った政治家であった。

1953年にブガンダのカバカが、イギリス政府の進めようとした「東アフリカ連邦」政策に反対して国外追放になった時、UNCに内紛が起こり、これを收拾できなかったムサジは、凡庸な指導者と

呼ばれて、忘れ去られていった。非ガンダ人勢力が党を割ってUPC (ウガンダ人民会議) を創設し、オボテがその指導者となり、ブガンダ内では保守派が強くなって「カバカ・イエッカ」(カバカ唯一党)が創設され、ウガンダ独立時の政権は、この二党の連立内閣が担うことになったのである。27年前にウガンダにいた時、二度ほどムサジに面会し、短時間、話を聞いたこともあったが、その後の彼はどうなったのか判らず、多分アミン大統領時代の虐殺で、彼も生命を落としたのだろうと思っていた。

ところが、今回カンバラで、ムサジの消息を聞いたところ、彼は最近まで生きていて、死去したときは「建国の父」として手厚く葬られ、コロロの丘に彼の墓があつて碑銘もあるという。さっそくその場所を探しに出かけ、もと独立式典などに使用されていた平らなグラウンドの広い草原の中にその墓を見つけた。碑銘には次のように刻まれていた。

I. K. Musazi, 1905年生まれ, 90年10月22日死去, 90年10月27日埋葬。

ウガンダの人たちは、やはりムサジを忘れなかったのだと、私は感動をおぼえた。今もムサジのようにブガンダの人でありながらウガンダ全体のことを考え、恐れずに行動する人こそが必要なのである。ムサジを高く評価し、国民にそのことを知らせた現ウガンダ大統領のヨエリ・ムセベニ自身を、私は尊敬したい気持ちになった。

(よしだ・まさお/中部大学国際関係学部)